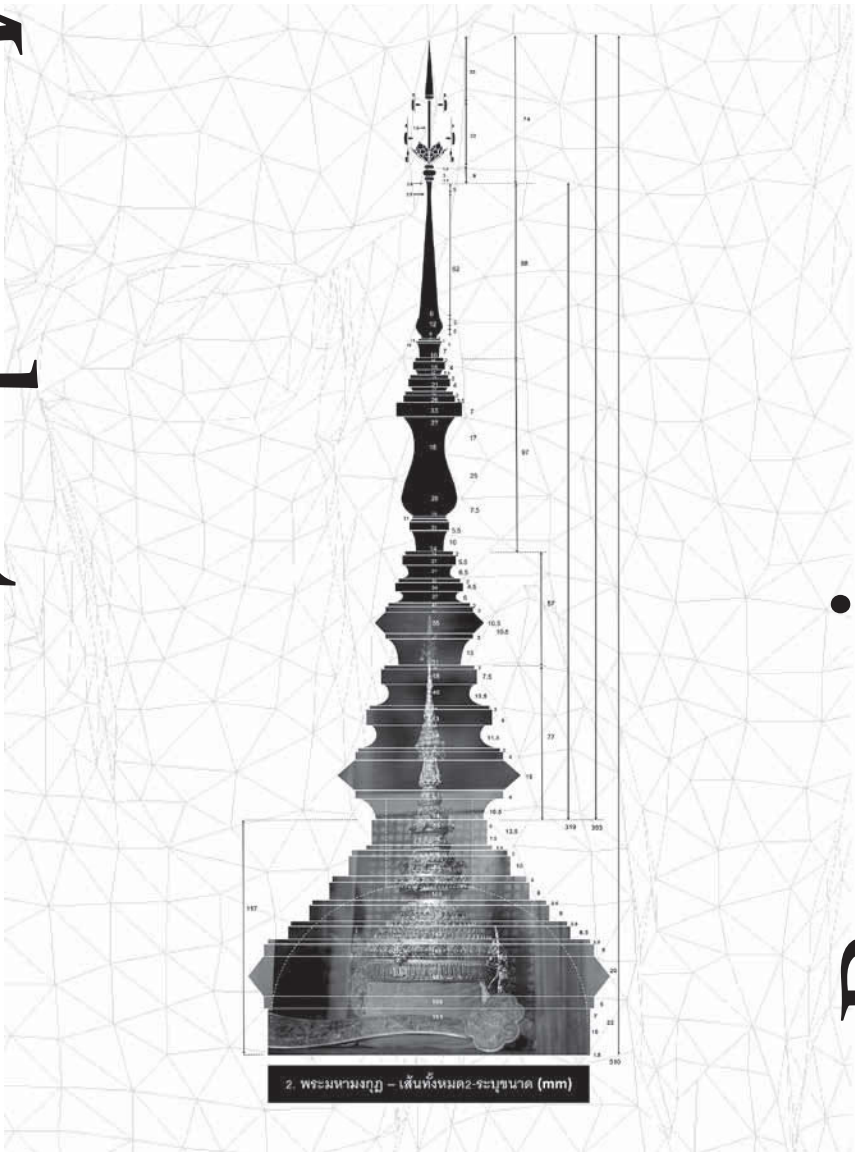


Monkkut

Saturday, October 28 – Sunday, November 26, 2017
Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA



Arin Rungjang

東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業 In partnership with Culture City of East Asia 2017 Kyoto

アリン・ルンジャン「モンクット」

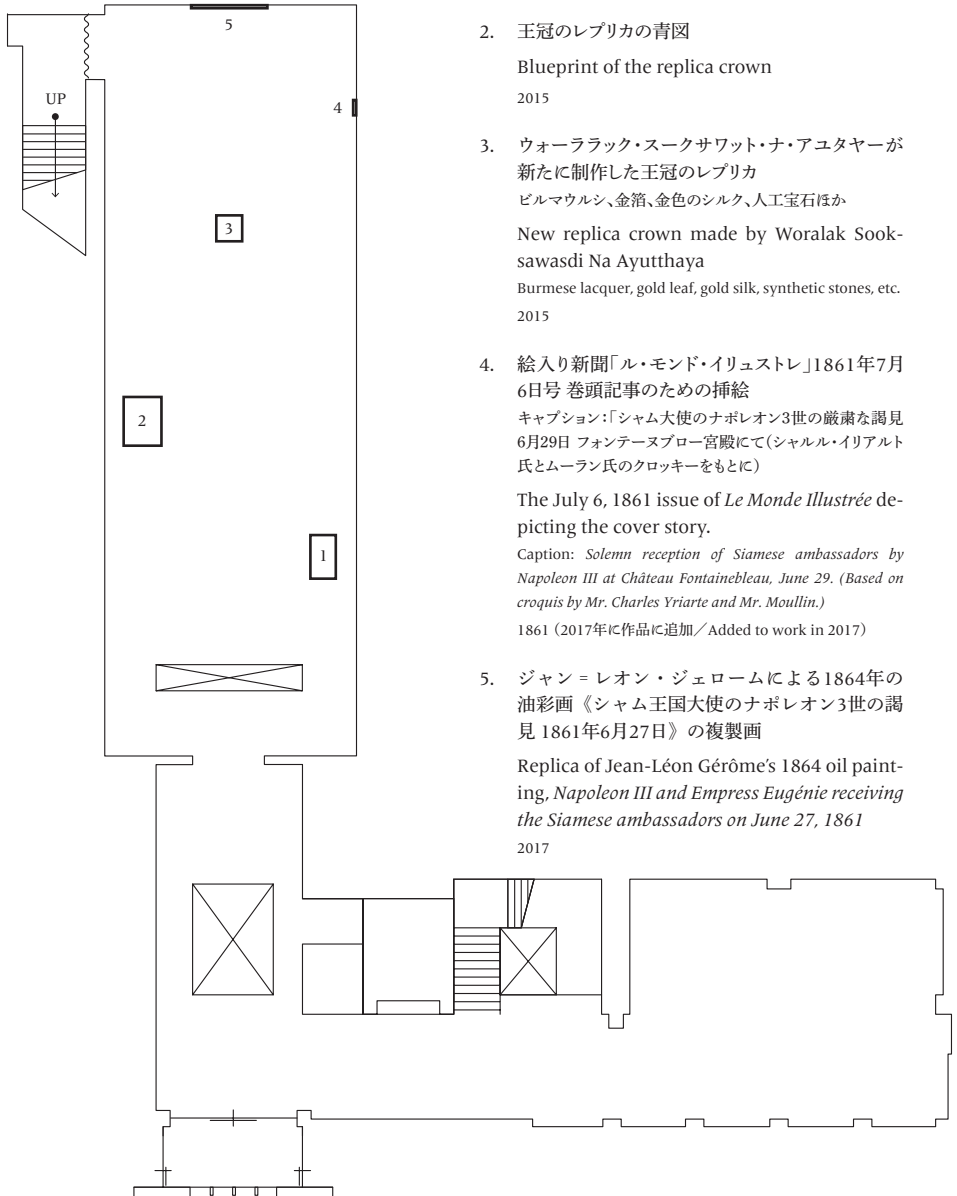
2017年10月28日[土]—11月26日[日] | 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

時間 | 11:00-19:00 休館日 | 月曜日 観覧料 | 無料

企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA 主催 | 京都市立芸術大学 助成 | 公益財団法人 朝日新聞文化財団

協力 | Gallery Ver、東アジア文化都市2017京都実行委員会(東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業)、Future Perfect

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
〒604-0052 京都市中京区伊弉利本町238-1
Tel: 075-253-1500 E-mail: gallery@kcuu.ac.jp
http://gallery.kcuu.ac.jp



1. 新たに制作した王冠のレプリカの部品

ビルマウルシ、金糸、人工宝石ほか

Elements of the new replica crown

Burmese lacquer, gold thread, synthetic stones, etc.

2015

2. 王冠のレプリカの青図

Blueprint of the replica crown

2015

3. ウォーラック・スークサワット・ナ・アユタヤーが新たに制作した王冠のレプリカ

ビルマウルシ、金箔、金色のシルク、人工宝石ほか

New replica crown made by Woralak Sook-sawasdi Na Ayutthaya

Burmese lacquer, gold leaf, gold silk, synthetic stones, etc.

2015

4. 絵入り新聞「ル・モンド・イリュストレ」1861年7月6日号 巻頭記事のための挿絵

キャプション:「シヤム大使のナポレオン3世の厳肅な謁見
6月29日 フォンテーヌブロー宮殿にて(シャルル・イリアルト
氏とムーラン氏のクロッキーをもとに)

The July 6, 1861 issue of *Le Monde Illustrée* depicting the cover story.

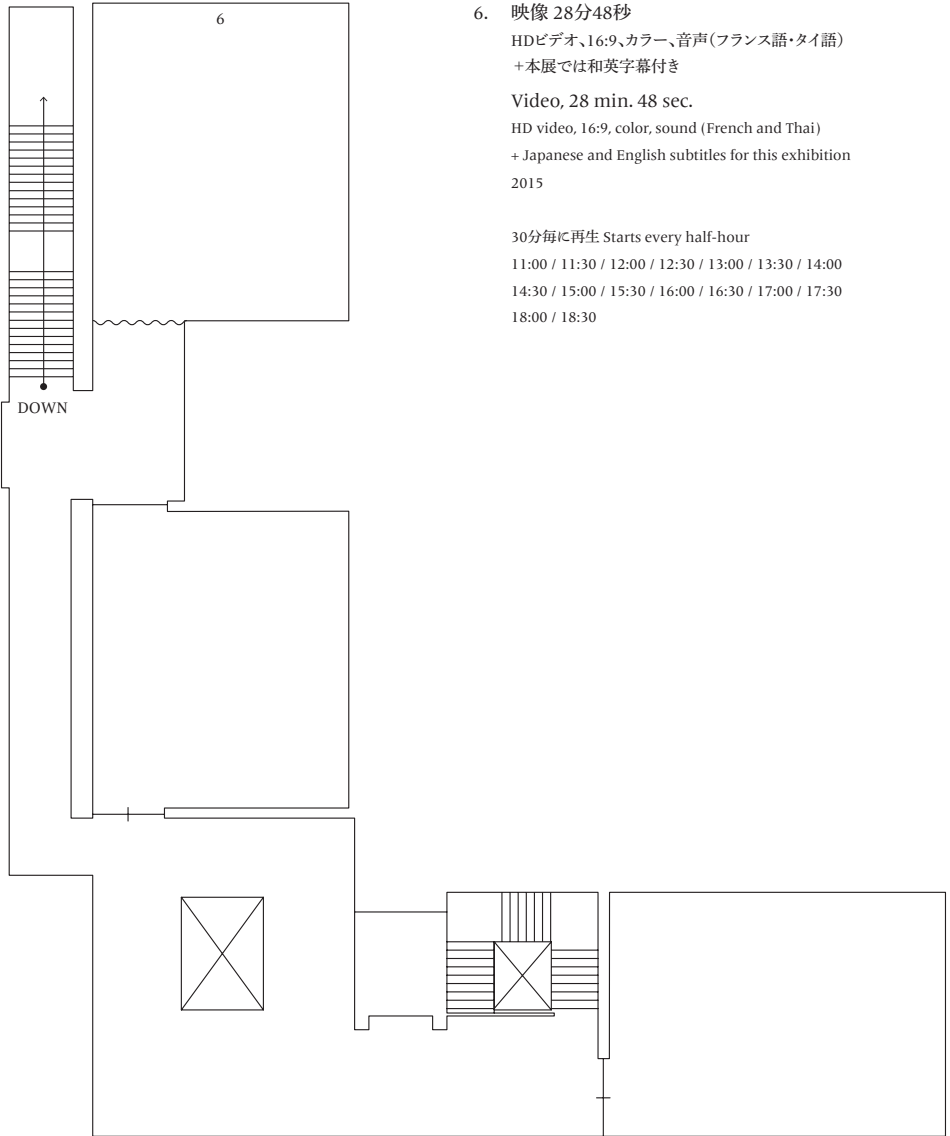
Caption: *Solemn reception of Siamese ambassadors by Napoleon III at Château Fontainebleau, June 29. (Based on croquis by Mr. Charles Yriarte and Mr. Moullin.)*

1861 (2017年に作品に追加/Added to work in 2017)

5. ジャン＝レオン・ジェロームによる1864年の油彩画《シヤム王国大使のナポレオン3世の謁見 1861年6月27日》の複製画

Replica of Jean-Léon Gérôme's 1864 oil painting, *Napoleon III and Empress Eugénie receiving the Siamese ambassadors on June 27, 1861*

2017



6. 映像 28分48秒

HDビデオ、16:9、カラー、音声(フランス語・タイ語)
+本展では和英字幕付き

Video, 28 min. 48 sec.

HD video, 16:9, color, sound (French and Thai)
+ Japanese and English subtitles for this exhibition
2015

30分毎に再生 Starts every half-hour

11:00 / 11:30 / 12:00 / 12:30 / 13:00 / 13:30 / 14:00

14:30 / 15:00 / 15:30 / 16:00 / 16:30 / 17:00 / 17:30

18:00 / 18:30

年譜:タイ・フランス 外交史

1656-88

ナーラーイ王の時代にフランス、イギリス、バチカン市国を中心とした欧米の国々や、イラン、インド、中国などとの外交が大きく発展する。フランスとシャム（現タイ）との間を使節が何度も行き来し、他国の勢力がアユタヤ王朝においてかつてないほどの影響力を持つことになる。

1662

ローマ教皇アレクサンデル7世により、シャムは使徒座代理区となる。これをきっかけに、シャムとフランスとの交流が本格的に始動する。パリ外国宣教会が東アジア布教を目的として実質的に発足する。シャムは聖職祿受益権を東アジアで初めて得る。シャムとフランスの公式の外交は、ランベール・ド・ラ・モット司教のアユタヤ到来により幕を開ける。

1664

イギリスとオランダの対インド貿易に対抗して、フランス東インド会社が設立される。

1680

シャム初の大使であるパヤー・ピバッゴサーは、ソレイユ・オリエント号に乗船しフランスに向かうが、アフリカ沿岸で沈没し死去する。フランス・タイ貿易は、フランス東インド会社によるシャムへの船の派遣とともに開始。

1684-86

1684年にクン・ピジャイワニ氏とクン・ピジマイトリー氏が率いる外交使節団が再びフランスに派遣され、タイへのフランス外交使節団の派遣を要望する。ヴェルサイユにてルイ14世に謁見。それにより、1685年にルイ14世はシュバリエ・ド・ショモンが率いる使節団を派遣。1686年にシュバリエは次のシャム使節団とともにフランスに帰国する。

1687

フランスの外交使節団と軍がシャム

に派遣される。兵士と宣教師、外交官、乗組員あわせて1361名が軍艦5隻で到来。フランス軍司令官デファルジュはルイ14世により「いかなる手段を使ってもメルギーとバンコクに拠点を築くよう交渉すべし」との使命を受ける。ナーラーイ王は、フランスの長官が指揮する要塞をこの2都市に建設することに同意。

1688

シャムにおける廷臣や仏教徒による外国人排斥運動が最高潮に達する。タイの官吏ペートラーチャーがシャム革命を起こし、ロップリーの王宮を制圧しナーラーイ王を自宅監禁する。ナーラーイ王はこの年の7月11日に死去。ペートラーチャーの戴冠式後、メルギーとバンコクのフランス軍は撤退し、フランスとの外交は19世紀までほぼ途絶えることになる。

1760-65

フランス軍がビルマ軍エリート部隊を結成し、ビルマによるシャム侵攻を企てる。

1851

モンクットの名で知られる、チャクラー王朝の第4代国王となるラーマ4世の戴冠式が執り行われる。

1856

フランスがタイとの外交を再開。皇帝ナポレオン3世はシャル・ド・モンティニ率いる使節団をモンクット王のもとへ派遣する。貿易を促進し、信教の自由を保障する一方で、フランス海軍艦艇のバンコクへの入港を許可するという条約が締結される。

1859

皇帝ナポレオン3世の命により、フランスがサイゴンを占拠し、コーチシナに植民地を築く。

1861

モンクット王により派遣されたパヤー・シービパット（ペー・ブンナーク）率いるシャム使節団が、フランス海軍艦艇でフランスに渡る。皇帝ナポレオン3世と皇后ウジェニー、皇太子はフォンテーヌブロー宮殿に使節団

を迎え入れる。王冠のレプリカをはじめ、豪華な贈り物を皇帝に授ける。

1867

フランスが正式にコーチシナ（ベトナム南部）を直轄植民地とする。カンボジア国王ノロドムは自国をフランス保護国とするように要望し、カンボジアに対する宗主権を放棄するようシャムに迫る。

1868

モンクット王が崩御。

1893

イギリスとフランスが植民地支配を拡げるなか領土をめぐる仏泰戦争（フランス＝シャム戦争）が始まる。ラオスはフランス領となり、ビルマ北東部シャン州がイギリス領となる。

20世紀

フランスのシャム領有権拡大を防ぐべくイギリスが仲裁にでる。1909年の英シャム条約によりシャムは領土をイギリスに割譲する。20世紀初頭、政府内ではナショナリズムが高まり、これらの領土喪失は西欧列強に対して自らの主権を主張すべき必要があることのシンボルとして用いられる。

1940-41

ヴィシー政権下のフランスとタイとの間で、フランス領インドシナにあるタイがかつて保有していた地域をめぐる、タイ・フランス領インドシナ紛争が勃発。日本が後押しして停戦と講和条約にいたり、フランスはカンボジア領土の大半をタイに割譲する。

1950

ラーマ9世が戴冠。

2016

ラーマ9世が崩御。

2017

10月26日にラーマ9世の葬儀が執り行われる。年末までに新国王ラーマ10世の戴冠が予定されている。

Selected Tales: Franco-Siamese Relations

1656–88

During the reign of King Narai there is a major expansion of diplomatic missions between Siamese and Western powers, in particular France, England, and the Vatican, as well as Persia, India, and China. Numerous embassies are exchanged between France and Siam. Foreigners exert unprecedented influence at the Siamese court.

1662

Siam is made a vicariate apostolic by Pope Alexander VII, paving the way for the first major contacts between Siam and France. The *Missions Étrangères de Paris* (Paris Foreign Missions Society) is created to carry out missionary work in the Far East. Siam is the first beneficiary. The first official contact between Siam and France is marked by the arrival in Ayutthaya of Bishop Monsignor Lambert de la Motte.

1664

The French East India Company is founded in order to compete with the English (later British) and Dutch East India companies.

1680

The first Siamese ambassador, Phya Pipatkosa, is dispatched to France aboard the *Soleil d'Orient*, but dies when the ship founders off the coast of Africa. Trade between France and Siam begins when the French East India Company sends a ship to Siam.

1684–86

A second embassy is sent to France in 1684, led by Khun Pijaiwanit and Khun Pijitmaetri, requesting the dispatch of a French embassy to Siam. They meet with Louis XIV in Versailles. As a result, Louis XIV sends a diplomatic mission in 1685 led by the Chevalier de Chaumont, who returns to France in 1686 accompanied by a new Siamese embassy.

1687

French ambassadors and troops are dispatched to Siam, including 1,361 soldiers, missionaries, envoys, and crews aboard five warships. French General Desfarges has instructions from King Louis XIV to negotiate bases at Mergui and Bangkok by any means necessary. King Narai agrees to the establishment of fortresses commanded by French governors in the two cities.

1688

Hostility from courtiers and Buddhist clergy to foreigners in Siam reaches a peak. Phetracha, the Siamese mandarin initiates the Siamese revolution by seizing the royal palace in Lopburi and placing King Narai under house arrest, where he dies on July 11. Following the coronation of Phetracha, French troops in Mergui and Bangkok are evacuated and relations with France are almost completely broken off until the 19th century.

1760–65

French troops form an elite corps of the Burmese army and take part in the Burmese invasions of Siam.

1851

Coronation of Siam of Rama IV, the fourth king of the Chakri Dynasty, also known as Mongkut.

1856

France resumes official contacts with Siam when Emperor Napoleon III sends an embassy to King Mongkut led by Charles de Montigny. A treaty is signed to facilitate trade, guarantee religious freedom, and allow French warships access to Bangkok.

1859

Under the orders of Emperor Napoleon III, France captures Saigon and establishes the colony of Cochinchina.

1861

French warships bring a Siamese embassy, dispatched by King Mongkut and led by Phya Sripipat (Pæ Bunnag), to France. Emperor Napo-

leon III, Empress Eugénie and the Prince Imperial receive the embassy at the Château de Fontainebleau. Lavish gifts are bestowed, including a replica of the royal crown.

1867

France officially establishes its colony in Cochinchina (southern Vietnam). Cambodian King Norodom requests the establishment of a French protectorate over his country, forcing Siam to renounce suzerainty over Cambodia.

1868

Death of King Mongkut.

1893

Franco-Siamese War begins due to territorial disputes over expanding British and French colonies. The war ends with Siam ceding Laos to France and the Shan region of northeastern Burma to the British.

20th century

The British intercede to prevent more French expansion against Siam and Siam loses land to the British in the Anglo-Siamese Treaty of 1909. In the early 20th century, a nationalist government uses these losses as symbols of the need for Siam to assert itself against the West and its neighbors.

1940–41

French-Thai War is fought between Thailand and Vichy France over certain areas of French Indochina that had once belonged to Thailand. A Japanese-sponsored ceasefire and peace treaty see the French cede major territories to Thailand from Cambodia.

1950

Rama IX, the current Thai king as of 2015, is crowned.

2016

Rama IX passes away.

2017

Rama IX is cremated on October 26. The new Thai king, Rama X, is scheduled to be coronated by the end of the year.

アリン・ルンジャー（1975年バンコク生まれ、同市在住）は、複数の時代と場所、言語を横断しながら大きな物語と小さな物語を交差させ、歴史上の事物を巧みに再検討することで知られています。ルンジャーはタイの歴史上の知られざる側面や、作品制作の現場とコンテクストの中でそれらが現在と交差するところに関心があり、時空間上ではかけ離れている事象を結びつけるモノに着目します。

《モンクット》ではルンジャーの疑問を軸に、タイで敬愛されてきた象徴的な存在である「王冠」が取り上げられています。彼はリサーチをする中で、ラーマ4世（1851-68）とナポレオン3世（1852-70）との統治期間が重なる時期のフランス・タイ外交関係を振り返ります。それは、東南アジアと称される地域で西欧諸国が植民地支配を強めた時期と重なっています。

それまでの数世紀にわたり、シャム（タイの旧称）は当地域の中でもっとも豊かで強大な王国でした。ラーマ4世は、植民地化を回避するために友好的な外交政策や通商協定を採用し、帝国主義に駆られたフランスとイギリスの利害関心を巧みに調整していたことで知られています。シャムは当地域で公式の植民地支配をまぬがれた唯一の国家であり、その功績は誇りに思われるとともに議論も呼んでいます。

映像や彫刻などで構成される《モンクット》では、シャムの相対的主権にまつわる知られざる歴史に光をあてるためのコンテクストとして、現在が用いられています。西欧ではモンクット王（「モンクット」はタイ語で「王冠」を意味する）として知られるラーマ4世は、自らが受け継いだ王冠を2度にわたり複製しました。1861年6月27日、フォンテーヌブロー宮殿にてシャムの大使により2つ目のレプリカがナポレオン3世に贈られました。

本作の一部を成す映像は、パリのギメ東洋美術館の東南アジア美術部門のチーフキュレーターであるピエール・バティストによる語りとともに、薄暗い冬の光に包まれた宮殿という美しいシーンから始まります。バティストがフランスとタイとの宮廷関係や外交で献納された品々や陳列における構成の正当性などさまざまな話題について触れるなか、一人の若い男が誰もいない宮殿をめぐり、ナポレオン3世の妻である皇后ウジェニーの応接間で、本来の場所に安置されているレプリカの王冠を見つけます。彼はガラス張りの陳列棚の前に立ち、手持ち式の小型3Dスキャナーをさりげなく使います。

映像の第2部は、モンクット王の子孫にあたる、コーン仮面舞踏劇の仮面や冠の職人、ウォーラック・スークサワット・ナ・アユタヤーによる語りで構成されています。スークサワットが家系や王冠の技法について語るなか、カメラは柔らかなでトロピカルな光にあふれた工房の隅々を映し出します。道具や素材に囲まれて、スークサワットと夫は、宮殿で若い男が得た3Dスキャンデータを参照します。データにより無限に複製することができるとも関わらず、彼女たちは手作業で行います。彼女たちの作業の目的をほのめかしつつ、映像は骨身を惜しまない工程を捉えることに終始します。スークサワットが仕上げた大作、すなわち1782年に作られた王冠を基にして1861年に複製したレプリカを2015年にさらに複製したレプリカは本展の展示室内でご覧いただけます。

この作品は2015年にパリのメゾン・ダール・ベルナル・アントニオズで発表され、同年にフランス・ボルドーのCAPCボルドー現代美術館で展示されました。今回はボルドー以来初めて本作を展示しています。ルンジャーはこの機会に二つの新たな要素を作品に加えています。ひとつはフランスの挿絵入り新聞「ル・モンド・イリュストレ」1861年7月6日号の巻頭記事のための挿絵で、もうひとつはフランス人画家ジャン＝レオン・ジェロームが1864年に描いた大きな絵画作品を2017年に複製したレプリカです。共にフォンテーヌブロー宮殿でシャムの外交使節を迎えるナポレオン3世を描いており、絵画の前景には献納された王冠が配置されています。

《モンクット》のこの複雑な連鎖により、一般的に受け継がれてきた直線的な歴史は再考を迫られます。《モンクット》の象徴的な交渉力に対するルンジャーの繊細なアプローチは、タイが得た主権と過去と現在についての物語のある側面を明らかにします。現在の視点から見ると——それは信頼できる証を得られないほどの至近距離の眼差しだと彼は考えていますが——、王冠のこの最も新しいレプリカは「両極を映す鏡」となるでしょう。

上記文章および年譜は作家より提供された英文（文章は2015年エリン・グリーンソンによりジュド・ボーム国立美術館のために執筆、年譜は同展示の書籍に収録）を本展に際して和訳し、加筆修正したものです。

Arin Rungjang (born 1975 in Bangkok; lives and works in Bangkok) is known for deftly revisiting historical material, overlapping major and minor narratives across multiple times, places, and languages. His interest lies in lesser-known aspects of Thai history and their intersection with the present in the sites and contexts of his practice. Objects, which can draw together distant events across time and space, are central to his investigations.

Mongkut puts one of Thailand's cherished symbolic forms at the axis of his inquiry. Rungjang's research for the work recalls Franco-Thai relations during the parallel reigns of King Rama IV (1851–68) and Napoleon III (1852–70), a period marked by the expansion of the European colonial enterprise in much of the geographic region known today as Southeast Asia.

For centuries prior to this period, Siam was the wealthiest and strongest kingdom in the region. To avoid colonization, Rama IV famously pursued friendly foreign policies and trade agreements, effectively balancing the encroaching interests of French and British imperialism. Siam became the only nation in the region to escape official colonial rule, a legacy that inspires pride but also debate.

In the multi-part work *Mongkut*, Rungjang uses the present as a context for reopening a little-known history concerning Siam's relative sovereignty. Rama IV, known in the West as King Mongkut (meaning "crown" in Thai), twice copied his inherited royal crown. On June 27, 1861, the second replica was offered to Napoleon III by the Siamese ambassador at the Château de Fontainebleau.

In the video, Rungjang first presents the visually rich *mise-en-scène* of the château in somber winter light, narrated by Pierre Baptiste, renowned curator of Southeast Asian Art at the Musée Guimet. As Baptiste reviews a range of topics from the history of Franco-Thai inter-court relations to the legitimacy of diplomatic offerings and frameworks of display, a young man tours the rooms in solitude, locating the replica in situ, in the drawing rooms of Empress Eugénie, Napoleon III's wife. Standing at the glass display cabinet, the man casually uses a small, handheld 3D scanner.

The second part of the video is a portrait of Woralak Sooksawasdi Na Ayutthaya, King Mongkut's great, great, great granddaughter and master

craftswoman of theater crowns. As Sooksawasdi's narrative shifts between family genealogy and the royal craft, the camera explores the studio awash with soft tropical light. Amongst specialized tools and materials, Sooksawasdi and her spouse reference the sensor data acquired by the young man at the château. Ignoring the infinite replication potential offered by the data, they enact the handmade. While the moving image hints at their labors' goal, Rungjang leaves us with painstaking process. It is in the exhibition that we find Sooksawasdi's finished masterpiece – the 2015 replica of the 1861 replica of the original 1782 Chakri Royal Crown of Siam.

The work was first shown at Maison d'Art Bernard Anthonioz in Paris by Jeu de Paume, and then at CAPC musée d'art contemporain de Bordeaux in 2015. The present exhibition marks the first time that the work is being shown since the two exhibitions in France. For this occasion, Rungjang has added two new elements to the work: A page from the July 6, 1861 issue of *Le monde illustré* depicting its front-page story, and a new replica made in 2017 of the large 1864 painting by Jean-Léon Gérôme based on the same scene, titled *Napoleon III and Empress Eugénie receiving the Siamese ambassadors on June 27, 1861*. The 1861 replica of the crown is carefully placed in the foreground of the painting.

The complex continuum of *Mongkut* disturbs the linear chronology we generally inherit. Rungjang's delicate approach to the symbolic negotiating power of the object deliberately offers only part of the story of Thailand's qualified sovereignty, past and present. Seen through the lens of the present – a gaze he believes is too immediate to reveal reliable evidence – the latest version of the crown becomes, according to the artist, a "bi-polar looking glass."

The above is based on text provided by the artist, written by Erin Gleeson for Jeu de Paume in 2015, with updates pertaining to the present exhibition. The chronology on the preceding pages are also excerpted from the publication accompanying the 2015 exhibition, with additions to bring the timeline up to the present day.

アリン・ルンジャン「モンクット」

2017年10月28日 [土] -11月26日 [日]

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

企画 || 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

主催 || 京都市立芸術大学

助成 || 公益財団法人朝日新聞文化財団

協力 || Gallery Ver、DC Collection、東アジア文化都市
2017 京都実行委員会 (東アジア文化都市 2017 京都 アジア回
廊 現代美術 特別連携事業)、Future Perfect

王冠制作 || ウォーラック・スークサワット・ナ・アユ
タヤー

展示設営 || 池田精堂、安藤隆一郎、入澤聖明、川田知志、
熊野陽平、鬘恒太郎、西尾咲子

広報物デザイン || 尾中俊介 (Calamari Inc.)

Woralak Sooksawasdi Na Ayutthaya

Niwat Manatpiyalert

Wiroj Worapunyawet

Pierre Baptiste

Napoleon III

Napoleon Bonaparte

King Narai

Louis XIV of France

Prosper Mérimée

King Mongkut (King Rama IV)

H.H. Prince Sukhasvasti

Chao Chom Manda Chan

H.S.H. Kittidechkachorn

M.R. Charoonsvati Sooksawasdi

M.L. Phansawat Sooksawasdi

Simon de la Loubère

Video directed by Arin Rungjang

Producers: Cattleya Paosrijaroen,
Pathompong Manakitsomboon

Screenplay by Arin Rungjang

Cinematographer: Pathompon
Tesprateep

Assistant Cinematographer: Danaya
Chulphuthiphong

Assistant Camera: Peetipong
Napachaithep

Editor: Vorakorn Ruetaivanichkul

Sound Recordists/Boom Operators:

Sarawut Panta, Chalermat Kaweewattana

Fontainebleau Unit

Cinematographer: Pathompon
Tesprateep

Assistant Cinematographers: Viriya
Chotpanyavisut, Charika Sarisut

Sound Recordist/Boom Operator:
Julien Sena

French Translator: Marisa
Phandharakrajadej

Digital Intermediate at White Light
Studio

Post Production Supervisor: Lee
Chatametikool

Post Production Producer: Siripun
Sangjun, Anuttara Charœnchit

Senior Colorist: Passakorn Yaisiri

Colorist: Chaitawat Thisansri

Digital Conform: Sittiporn
Rungworakhun

Assistant Digital Conform: Siramol
Chaisathit

Sound Post-Production: One Cool
Production Co., Ltd.

Supervising Sound Editor/Re-
Recording Mixer: Nopawat Likitwong

Sound Editor/Dialogue Editor:
Tanadon Hosathitam, Wipooh
Wisaritpaisan

Still Photographer: Danaya
Chulphuthiphong

Subtitle Editor: Marisa
Phandharakrajadej

Camera Equipment: Red Snapper
Co., Ltd.

Painting by Nattawut Nilbut

Special Thanks: Jeu de Paume Team,
Erin Gleeson, Vincent Drogue
(Director of Heritage and Collections,
Château de Fontainebleau), Pierre
Baptiste (Chief Curator, Southeast
Asian Art, Musée National des
Arts Asiatiques Guimet), Dokmai
Ketcharoong, Sagyvan Ketcharoong,
Ketcharoong Family, Rassamee
Rungjang, Prayong Rungjang,
Ravissara Rungjang, Rungjang
Family, Luang Samak Salyoottra,
Sumol Champeerat, Champeerat
Family, Pantira Korkasemwong,
Sukrit Korkasemwong, Apissara
Korkasemwong, Umpornpol Yugala,
Soros Sukhum, Gridthiya Gaweewong,
Ark Fongsamut, David Teh, Maison
d'art Bernard-Anthonioz Team,
CAPC musée d'art contemporain
de Bordeaux Team, King Mongkut's
University of Technology Thonburi

Arin Rungjang: Mongkut

Saturday, October 28 – Sunday, November 26, 2017

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

Organized by Kyoto City University of Arts

With funding from the Asahi Shimbun Foundation

And the cooperation of the Culture City of East Asia 2017
Executive Committee, DC Collection, Future Perfect, and
Gallery Ver

Crown made by Woralak Sooksawasdi Na Ayutthaya

Exhibition installed by Seido Ikeda, Ryuichiro Ando,
Masaaki Irisawa, Satoshi Kawata, Yohei Kumano, Sakiko
Nishio, and Kotaro Tategami

Flyers, posters, and signage designed by Shunsuke
Onaka (Calamari Inc.)